

派遣者番号	R 4 K 1 1	氏 名	奥山 良太
研究主題 —副主題—	定量的な評価を活用した学級経営カンファレンスに関する事例研究		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	山田 雅彦
所属	日野市立東光寺小学校	所属長	斉藤 境栄

キーワード： 学級経営 児童理解 定量的評価 カンファレンス

要旨：学級経営を省察する上で定量的評価がどのように活用されるかを明らかにするため、児童への質問紙調査の結果を基に複数の教師による学級経営に関するカンファレンスを行った。カンファレンスでの発話内容を分析した結果、四つのカテゴリーが生成された。定量的な評価を活用することで、教師は児童の新たな一面を認識する。教師は実感と児童の評価を比較し、児童の自己評価の理由付けをしながら児童理解を深めていくと言える。複数の教師で継続的にカンファレンスを行うことにより、学級経営の方策を共有することや、児童の変容を追うこと、以前と比較して学級の様相を把握することへとつながる。一方で、定量的評価をそのまま学級経営に活用することは難しいと懐疑的な面も見られた。この点を考慮することで、定量的評価を補助的に学級経営改善へと活用することができると考えられる。

定量的な評価を活用した学級経営カンファレンスに関する事例研究

奥山 良太

1. 研究の目的

本研究の目的は学級経営を省察する上で定量的評価がどのように活用されるかを明らかにすることである。桂川泰典他は、「精神的充足・社会的適応力」評価尺度の結果が示されたマトリックスを用いて教師に聞き取りを行ったところ、約 10 名の生徒が教師の予想と異なる位置にあり、「予想とマトリックスの相違点について教師間で話し合うことが、生徒理解を深める契機となった」としている（桂川他, 2011）。また、瀧口信晴他は学級内での社会性を見取るための児童用自己評価シートを開発し、担任の評価と児童の自己評価を比較した。その結果、「教師の見取りが必ずしも正確であるとは限らないこと、補助的な評価方法として定量的なシートを活用することの必要性」を示した（瀧口他, 2014）。このように、児童生徒による評価と教師の観察に基づく実感の間には乖離がある。定量的な評価を活用するに当たっては、回答結果の数値を数値として受け止めたり、類型化された学級集団に当てはめたりするだけでなく、教師の実感との乖離やその乖離の要因について互いに検討することが多面的な児童理解につながると考える。

本研究では、教師が日常の実感と実際の児童の定量的評価の乖離をどのように捉え、学級経営改善につなげていくのかを明らかにする。その際、複数の教師による継続的な活用から数値に対する捉え方に着目して検証した。

2. 研究の方法

都内公立小学校（第 5 学年 2 学級）を対象に、瀧口他の「社会性自己評価シート」を基にした質問紙調査を実施した。結果を散布図に可視化し、それらを資料に学級経営に関するカンファレンスを実施した。参加者は、学級担任、学年の教員、専科担当教員、養護教諭、特別支援教室巡回指導教員とした。カンファレンスは9月上旬、10月中旬、12月上旬の計 3 回実施し、発話内容を分析した。

3. 研究の成果

佐藤郁哉 (2008) を参考にカンファレンスのデータに対して質的データ分析を行った。分析の結果、四つのカテゴリーと九つのサブカテゴリーが生成された（表 1）。

(1) 【新たな認識】

児童の自己評価を可視化することによって、普段の観察だけでは意識化されていない児童理解が行われる。2 回目以降のカンファレンスでは、前回との比較から、児童の変容が認識される。

(2) 【認識の深まり】

教師は実感と児童の自己評価を比較したり、実感と数値を結び付けたりすることを通して児童理解を深める。カンファレンスを通して気になる児童が浮かび上がり、児童の内面を理解しようとする。

(3) 【学級の把握と方策の検討】

学級の様相を把握し、それぞれの役割や立場から学級経営に関わろうと手だてが語られる。カンファレンスを通して教師間での共通理解が図られる。

(4) 【数値への懐疑】

数値はあくまで数値であり、それらを当てに児童理解を行うことは難しいというもの

や、数値には表れない部分の実感を大切にしている教師の捉え方も見られる。

4. まとめと課題

定量的な評価を活用することで、児童の新たな一面が認識される。教師は実感と児童の

表1 学級経営カンファレンス カテゴリー サブカテゴリー

【カテゴリー】	「サブカテゴリー」	〈コード〉 ○はコード数
【新たな認識】	「新たな発見」	〈自己評価の高い児童の発見④〉 〈配慮する児童の発見⑰〉
	「変容の認識」	〈自己評価が上がった児童の発見⑩〉 〈自己評価が下がった児童の発見③〉
【認識の深まり】	「実感との比較」	〈実感通り⑤〉 〈実感より高い⑤〉 〈実感より低い⑱〉
	「気になる児童」	〈普段から気になっている児童⑬〉 〈変容を追う⑦〉 〈回答への注目④〉
	「実感と数値の結び付け」	〈思い当たること⑳〉 〈関連付け⑧〉 〈自己評価の要因の推測㉑〉
【学級の把握と方策の検討】	「学級の把握」	〈学級の様子⑭〉 〈クラスのよさ⑪〉 〈学級の課題㉒〉 〈クラスの変容⑧〉 〈以前の様子⑨〉 〈今後の可能性⑤〉 〈発達の段階②〉
	「学級経営の方策」	〈手だての検討 70〉 〈手だての実践⑩〉 〈指導の振り返り⑦〉
【数値への懐疑】	「数値への不信」	〈自己評価はその時の気分④〉 〈数値の解釈⑤〉 〈思い当たらない⑥〉
	「数値の非重要性」	〈数値には表れないこと⑨〉 〈長い目で見る④〉 〈自己評価は簡単には上がらない③〉

評価を比較し、児童の自己評価の理由付けをしながら児童理解を深めていくと言える。複数の教師による学級経営カンファレンスを行うことで、方策を共有することが可能となる。カンファレンスを継続して行うことにより、変容を追うことや以前と比較して学級の様相を把握することにつながる。児童や学級の変容を捉え、学級経営を改善していくためには複数回継続的にカンファレンスを行う必要があると言える。一方で、定量的評価をそのまま学級経営に活用することは難しいと懐疑的に捉えている部分があることも明らかとなった。定量的な評価を活用するに当たっては、この点を考慮することで定量的評価を補助的に学級経営改善へと活用することができると考えられる。日常的に複数の教師が集まって継続的なカンファレンスを実施することは難しいが、日常的な話し合いが学級経営に関わる問題の未然防止や早期発見へとつながることを考えると、今後は複数の教師がそれぞれの立場から学級の姿について話す機会を定期的に設けるなどの工夫が必要であると言える。

5. 成果の活用法

自身の今後の学級経営の省察へと役立てる。学級経営の方策を検討する上で定量的な評価を補助的に活用すること、複数の教員等で学級を捉えることを所属校へと還元していきたい。

6. 主な参考文献

桂川泰典・加藤陽子・綿井雅康・中村有・菅野純(2011)「『精神的充足・社会的適応力』評価尺度の学級経営への活用(1)―教師の実践的生徒理解との比較―(学校心理学、ポスター発表)」『日本教育心理学会総会発表論文集 第53回総会発表論文集』p.517。

佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』新曜社。

瀧口信晴・森田純・山田雅彦(2014)「学校現場における児童の社会性測定法の開発と活用に関する事例研究―小学校高学年の学級集団づくりのための活動を対象にして―」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系 I 65 p.75-86。